

関連文化財群④ 地域のよりどころ むらのまつり

概要

春は田植えの季節であり、農作業の始まりである。御田植祭が行われ五穀豊穡を祈願する。夏には、各地域で虫送りや風除けの行事が行われているところがある、秋には豊作を感謝して祭りが行われ、農閑期である冬にも盗難除けやマムシ除けの祭りが行われている。

このように、年間を通じて特に主な生業である農業に関する祭りが、地域で行われてきた。これらの祭りの一部は今に伝わり、自然に寄り添いながら生きてきた人々の営みを垣間見ることができる。

ストーリー

春の田植えの時期に、中山神社では御田植神事が執り行われ、笛や太鼓に合わせて雌雄の獅子が舞い、20人ほどの鍬人が祭具用の木鍬を振って田を打ち返す様子を演じ、五穀豊穡を祈る。起源については定かではないが、鎌倉時代から続いているといわれており、津山藩の町奉行日記にも神事の様子が記載されている。

五穀豊穡を感謝して行われる秋祭りは、今でも多くの集落で行われており、祭りの準備から当日にかけて、地域がにぎやかな雰囲気包まれる。

高田神社の秋祭りで行われる獅子舞は、獅子株と呼ばれる2人の指揮者の指図により雌雄獅子が笛と太鼓に合わせて舞を繰り広げる。各獅子には青年が各12人ずつ入り、向伴奏は、横笛8人と胴丸太鼓4人で行う。最後は、拝殿に突進（練りこみ）して舞を終える。このような大人数で行われる祭りは他にはなく、岡山県指定重要無形文化財に指定されている。

阿波地区で行われる阿波八幡神社の花祭りと、阿波地区に隣接する加茂町物見の物見の花まつりは、ともに岡山県指定重要無形民俗文化財に指定されている祭りである。この祭りには、氏子の各地区がそれぞれ趣向を凝らして、竹・木・色紙等を使って製作した傘型の造花によるダシを作成し奉納する。造花には、梅・桜・しだれ柳の3種でいずれも春の花である。御神幸に色彩を添えるため、各地区の若者がこの造花をもって先駆を練り歩き、相手の造花を壊しあう勇壮な行事である。起源はよくわかっていないが、五穀豊穡、家内安全を祈り感謝する祭りである。

新野まつりは、八幡神社を親神様として、地区の5社、旧6村の氏子たちが、神輿をかつぎ稲塚野の神事場に集まり、神輿を神座に安置する祭りで、岡山県指定重要無形民俗文化財に指定されている。祭場では、式典、直会、鍬振りが行われたのち、神輿の練が繰り返される美作

地方最大の祭りといわれている。祭りの詳細な起源はよくわかっていないが、今日のような姿になったのは、室町期であると推定されている。

農作業の終わった地域では、先輩に獅子舞の練習を見てもらおう若者の姿や浦安の舞の練習に励む子供たち、それらを見守る地域の人の姿等、祭り前の各地域には、独特の和やかな雰囲気を感じられる。祭りの当日は、各神社や参道に幟や提灯が立ち並び、地域の人々はもちろんのこと、地域を離れて生活をしている人々も帰ってきて、にぎやかな雰囲気の中で祭りは行われる。

冬の農閑期にも祭りは行われる。

貴布弥神社の境内にある社のうち奥御前神社は「狼様」と呼ばれ、盗難悪疫除けの神として人々の信仰を集めている。貴布弥神社では、霜月大祭のとき狼様の神事が行われる。社殿前の石灯籠に「天保 13 (1842) 年西々条郡東神戸村小沢武右衛門」とあり、江戸時代後半には遠方からも信仰を集めていたようである。今でも貴布弥神社と言って分からない人も、狼様と言えば分るほど地元の生活に溶け込んでおり、霜月大祭のときは多くの参拝者が集まる。

旧暦の元日から 3 日にかけて行われる福力荒神社大祭は、特にマムシ除けとして有名であり、多くの露店が立ち並び約 10 万人の人達が参拝しているといわれるほど、にぎやかな祭りである。

このように神社とそこで行われる祭りは、その時の社会情勢に柔軟に対応して継承されてきた。そのため今でも地域コミュニティの核としての役割を維持している。今回取り上げた祭り以外にも多様な地域の祭りが行われており、それらを取りまく人々の営みや景観も含めて守るべき、津山の歴史文化である。

構成文化財

1 高田神社の獅子舞



1-① 高田神社の獅子舞

毎年 10 月第 2 日曜日に行われる高田神社の秋祭りにおいて舞われている。高田神社は、大正 2 (1913) 年近郊五社が合併したもので、元は久保神社にて行われていた。雌雄の獅子に青年が各 12 人ずつ入り、向かい合って闘争する勇壮な舞である。伴奏は、横笛 8 人と胴丸太鼓 4 人で行う。

2 中山神社の御田植神事



2-① 中山神社の御田植神事

神事は笛や太鼓に合わせて雌雄の獅子が舞い、20人ほどの鋤人が祭具用の木鋤を振って田を打ち返す様子を演じ、五穀豊穡を祈る。起源については定かではないが、鎌倉時代から続いているといわれており、津山藩の町奉行日記にも神事の様子が記載されている。

3 八幡神社及び物見神社の花祭り



3-① 八幡神社の花祭り

八幡神社は、11月3日、物見神社は、10月25日以前の日曜日に若い衆が花を持って歩き、御神幸に色彩を添える。この花は、各地区が造花（竹・木・色紙により製作した傘形の一種のダシ）で作り、梅・桜・しだれ柳の3種でいずれも春の花である。創始の時代は、不詳であるが、社殿（再建延宝6（1678）年）の建立の頃とされている。由来は、家内安全、五穀豊穡を氏神様に祈願感謝する行事である。

4 新野まつり



4-① 新野まつり

新野まつりは、新野山形の八幡宮を親神様として二松・天穂日・天剣・天満神社の氏子たちが神輿を担ぎ、毎年11月3日に稲塚野の神事場に集まって豊穡の秋の祝い、新野郷すべての人々が喜びを確かめあい励ましあう一郷一所の大祭である。各神社の社伝は古く伝承行事もさまざまであるが、祭りの形態が今日のように郷土団結の様子を整えてきたのはおよそ室町期の頃であると推定されている。

5 貴布弥神社の霜月大祭



5-① 貴布弥神社の霜月大祭

毎年12月13日～15日の3日間「霜月大祭」が行われる。境内にある社のうち、奥御前神社は「狼様」と呼ばれ、盗難悪疫除けの神様として広く信仰を集める。ここで狼様の神事が行われ、多くの参拝者でにぎわう。

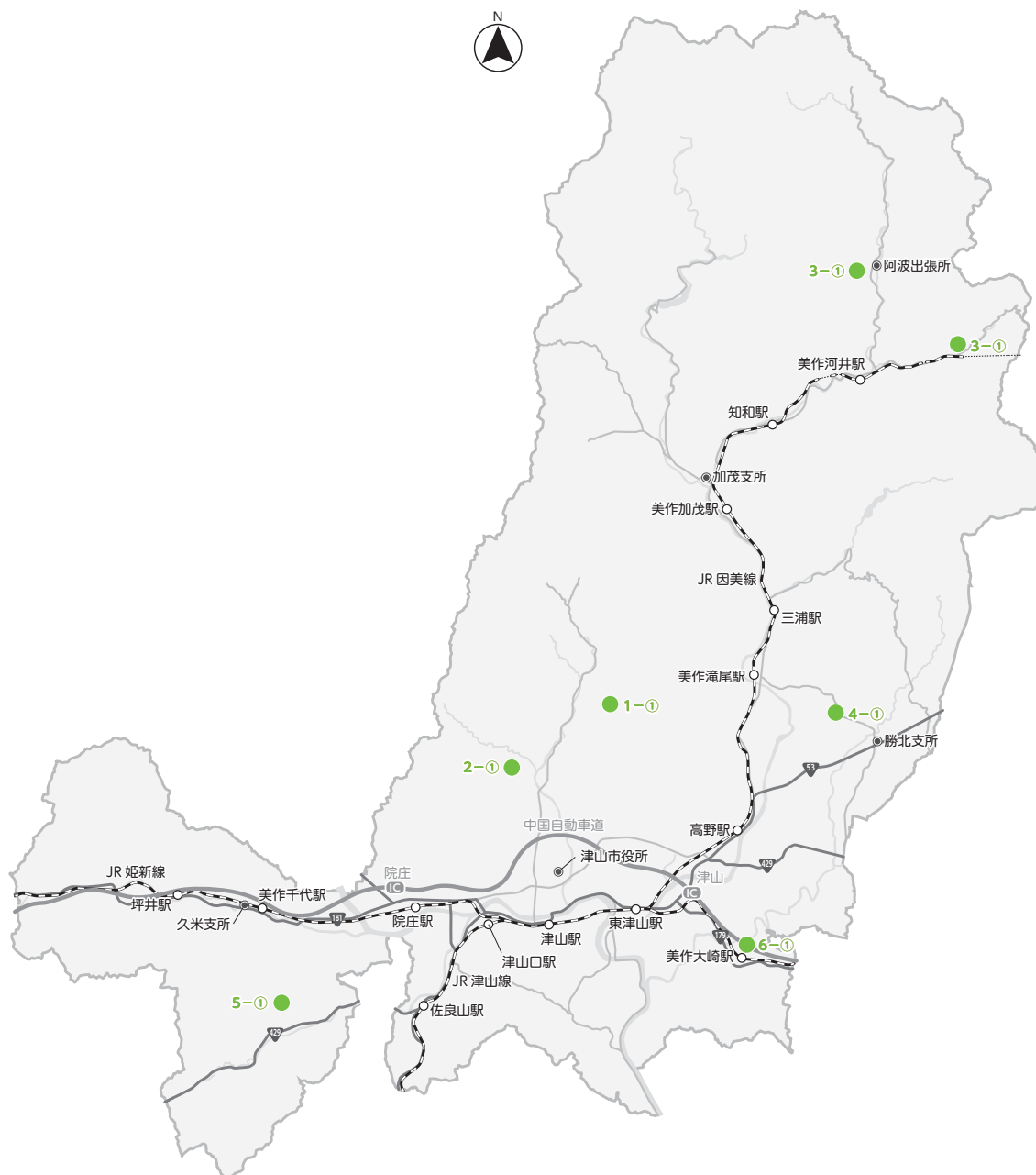
6 福力荒神社大祭



6-① 福力荒神社大祭

旧暦1月1日から3日の大祭に参詣すれば家族が1年間マムシの被害に遭わないといわれており、期間中は農協関係の屋台も出る等多くの屋台が立ち並び、大勢の参拝客でにぎわう。

地域のよりどころ むらのまつり



※番号は構成文化財の写真番号

関連文化財群⑤ 法然ゆかりの立石家

概要

法然上人の出自である漆間氏の本家である立石家は古代に九州の宇佐から美作へ移り住み、代々美作国二宮である高野神社の宮司として二宮の地に住み続けている。戦国時代には居住地背後の美和山1号墳を改変して美和山城を築き、詰めの城とした。江戸時代には宮司・大庄屋として地域に貢献し、近代には実業家として自宅敷地内に鉄道を敷設する等、津山地区の近代化に大きく貢献した。

ストーリー

■立石家の由来

元は漆間氏。豊前宇佐神宮の神官漆間元邦が延喜年間(901～920)美作に押領使(大野庄、神戸庄、稲岡庄)として移住し「神戸大夫」と称した。

元邦の長男盛国が立石家を継承し、二男盛栄が漆間家を世襲した。その後、漆間盛栄から五代を経た時国の子「勢至丸」が、9歳にして僧となり源空と名を改めた。彼が後の浄土宗開祖「法然」となる。

立石氏は美作国二宮である高野神社祠官となり、戦国時代には自宅の裏の前方後円墳を利用して、美和山城を築き、詰めの城とした。

立石家は、平安、鎌倉、室町時代を通じ、美作国二宮高野神社の社司を継承する一方、美和山城を本拠にして、武力集団を率いて領土を守る地頭として存在していた。高野神社は美作地方の鎮守であると同時に、立石一族の氏神でもあり、法然の生誕地誕生寺の寺紋も高野神社の社紋も二宮立石家の家紋もみな同じである。

■大庄屋として

慶長8(1603)年に森忠政が津山城主として入封すると、帰農して大庄屋となった。続く松平家の下でも、二宮立石家は引き続き大庄屋職に任じられた。森家も松平家も在地で古くからの勢力である立石家をうまく利用した。

■立石家と自由民権運動

幕末から明治時代のはじめにかけては、開国の影響と新政府による近代化への改革で、世の中が大きく変わりつつあった。そのころ美作で近代産業を発展させようと立ち上がったのは、

豪農といわれる人たちであり、明治 11 (1878) 年、立石岐^{たていしちまた}、中島衛^{なかしまもる}、内田饒穂^{うちだにぎほ}、安黒基^{あぐろもと}たちが、養蚕・製糸業をすすめようと「共之社」を結成した。さらに彼らは、岡山県議会創設に際し、県会議員に当選、明治 14 (1881) 年、美作自由党を組織する。板垣退助の自由党と連携して国会開設の機運を造成した。

彼らの運動は「豪農民権」といわれているが、その中心となって活躍したのは、立石岐であった。岐は、国会が開設されると、最初の議員となり、その後も明治 29 (1896) 年、中国鉄道株式会社取締役として鉄道の岡山津山間建設に取り組み、明治 31 (1898) 年に開通させた。また明治 32 (1899) 年、竹内文による「津山女学校」開校に際して、設立や運営に協力し、さらに二宮小学校の建設に際して、私有地を提供した。

晩年は、万人への愛を説き、森本慶三^{もりもとけいぞう}たちとキリスト教の伝導に努めた。そもそも立石家は浄土宗宗祖・法然上人ゆかりの家系といわれ、岐がキリスト教へ改宗することは親戚から強い反対を受けたが、岐は「むしろ自分の改宗は、他力本願を説く法然の志を継ぐものである」と述べたといわれている。

構成文化財

1 立石家住宅



1-① 立石家住宅

平安時代から二宮高野神社の社司を勤めてきた家柄である。戦国時代は古墳群のある美和山に城を構え、武士団を率いる地位にあった。森忠政が津山に入封した以後（慶長 8 年）は、帰農して現在の地に居を定めた。その立地は吉井川の支流と本流との間に横たわる低い丘陵地であり、その頂には美和山古墳群がある。その緩い斜面を、高野神社の参道に直交する形で、坂道が北へ延び、その先に立石家の館がある。後に山を控え、前に主要街道の通る眺望のよい岡の上に、堀や土塁を巡らして、中に居館を設けるのが、中世名主層の通例と云われており、立石家住宅の配置はまさにその典型であると言える。

2 高野神社



2-① 高野神社

安閑天皇 2 (535) 年の鎮座と伝えられる延喜式内社。美作国二宮として地元の尊崇厚く、社伝によると源頼朝は神門を建立し、山名氏は社殿の修造、神馬の奉獻、毛利元就及び小早川隆景は祭祀厳修を令し、社殿を修造したという。

国主森氏は代々深く崇敬の誠を尽くして社領 80 石を献じ、寛文 3 (1663) 年 2 代藩主長継は現社殿を造営。松平氏もまた年々祭資を供進し、現在、社殿は岡山県指定重要文化財に指定されている。

3 美和山城跡（美和山古墳群）



3-① 美和山城跡（美和山1号墳）

美作地方最大の前方後円墳を含む古墳群。北から1号墳（胴塚）（前方後円墳、全長80m）、2号墳（蛇塚）（円墳、直径34m）、3号墳（耳塚）（円墳、直径37m）と確認調査で発見された6号墳（円墳、直径16m）の4基の古墳で構成され、地元では「伝説」にもとづいて、それぞれ胴塚、蛇塚、耳塚と呼ばれならわしている。1、2、3号墳とも墳丘斜面を直径30cm程の葺石で覆い、円筒埴輪や器財型埴輪が用いられているが、埋葬施設等はいずれも未発掘で不明である。古墳の大きさや埴輪等から、1、2、3号墳は、古墳時代前半期（4～5世紀）にこの地域で勢力をのばした豪族の墓であると考えられる。また、戦国時代（15～16世紀）この地に美和山城が築かれていたことが文献に記されており、1号墳の東西の張り出しはその美和山城の土塁の跡とみられる。

4 グンゼ工場



4-① グンゼ工場

大正5（1916）年、二宮に「郡是蚕糸・津山分工場」として設立された工場。木造二階建ての本館及びノコギリ屋根の工場棟が残る。

法然ゆかりの立石家



※番号は構成文化財の写真番号

関連文化財群⑥ ここが違う中山造（神社建築の世界）

概要

美作国一宮の中山神社は、尼子晴久により建設された「中山造」と呼ばれる独特の建築様式を持っている。「方三間、入母屋造、妻入、唐破風の向拝」という外観で特徴づけられ、美作を中心に分布している。中山神社以外は江戸時代前半に主として藩主森長継により建設されており、津山市周辺の神社建築の特徴となっている。

ストーリー

■中山造の源流

現在の中山神社本殿は尼子晴久によって再建されたものである。棟札写しに記す頭領の「中尾藤右衛門藤原朝臣真次」は「伯州住」とあり、その所在はあきらかである。当時尼子氏は出雲の富田城を拠点にして山陰から美作にかけて広く制圧しており、大工棟梁を山陰伯耆から呼び寄せたものと思われる。

そしてこの時採用された「入母屋造妻入」の本殿形式が、のちの森藩の時代になって建造されることになる大社の基範として常に生き続けることになるのである。津山地方ではこの形式を中山神社に代表させて「中山造」と称している。入母屋造妻入本殿は他地方にもみられるが、津山を中心とする美作一円に分布し、しかも中山神社本殿がその一番古い遺構であることは注意される。

この形式の起源であるが、「切妻造妻入」の本殿を持つ出雲大社から一定の距離をもった地域ですでに純粋な大社造から発展変化した入母屋造妻入の社殿があつて、それが美作侵攻の意欲横溢した尼子氏によって新たにもたらされたものと推定されている。

中山造本殿遺構一覧表

名称	所在地	建立年代	西暦	根拠	規模	向拝	組物	指定
岡山県								
中山神社本殿	津山市	永禄2年	1559	古記	三間社	向唐破風	出三斗	重文
総社本殿	津山市	明暦3年	1657	棟札	三間社	向唐破風	出三斗	重文
高野神社本殿	津山市	寛文3年	1663	棟札	三間社	向唐破風	出組	県指定
徳守神社本殿	津山市	寛文4年	1664	棟札	三間社	向唐破風	二手先象鼻尾垂木	県指定
一宮神社本殿	真庭市	寛文6年	1666	棟札	一軒社	向唐破風	出組	
鶴山八幡神社本殿	津山市	寛文9年	1669	棟札	三間社	向唐破風	三手先象鼻尾垂木	重文
総社宮本殿	吉備中央町	寛文9年	1669	社伝	三間社	縫向拝	出組	町指定
高田神社本殿	真庭市	寛文11年	1671	棟札	三間社	向唐破風	二手先象鼻尾垂木	市指定

名称	所在地	建立年代	西暦	根拠	規模	向拝	組物	指定
日吉神社本殿	吉備中央町	延宝4年	1676	社伝	三間社	縫向拝	出組	町指定
春日神社本殿	真庭市	延宝7年	1679	棟札	三間社	向唐破風	出組	
化気神社本殿	吉備中央町	延享4年	1747	社伝	三間社	向唐破風	出組	町指定
塚角神社本殿	美咲町	宝暦5年	1755	棟札	三間社	縫、軒唐破風	出組	
御崎神社本殿	真庭市	18世紀中			一軒社	向唐破風	出三斗	
田神社本殿	津山市	18世紀中			三間社	向唐破風	出組	
吉田神社本殿	津山市	18世紀中			一軒社	縫向拝	出組	
志呂神社本殿	岡山市北区	嘉永元年	1848	棟札	三間社	向唐破風	三手先和様尾垂木	
古大隅神社本殿	津山市	明治			一軒社	軒唐破風	二手先	
島根県								
柿本神社本殿	益田市	正徳2年	1712	棟札	三間社	向唐破風	出組	
弥栄神社本殿	津和野町	江戸後期			一軒社	縫破風	三斗	
諏訪神社本殿	邑南町	嘉永7年	1854	棟札	一軒社	軒唐破風	三斗	
市木神社本殿	浜田市	昭和3年	1928		一軒社	軒唐破風	舟肘木	
鳥取県								
神奈川神社本殿	江府町	元禄14年	1701	棟札	一軒社	軒唐破風	二手先	
野坂神社旧本殿	鳥取市	安永9年	1780	棟札	一軒社	軒唐破風	出組	
西楽楽神社本殿	日南町	文化12年	1815	棟札	三間社	軒唐破風	二手先	
賀茂神社本殿	倉吉市	19世紀中			一軒社	縫破風	出組	
樋口神社本殿	大山町	明治32年	1899	棟札	一軒社	軒唐破風	二手先	

■美作地域の中山造系本殿

津山市内の神社本殿は妻入系がその主流であるが、その中にあるのは、正面入母屋背面切妻とするものが圧倒的に多く、全体の70%を占める。これらはすべて一間社で、必然的に小規模なものとなるが、それだけに造営費用の点からいっても比較的造りやすく、普遍したものと思われる。

現存する正面入母屋背面切妻の建物で一番古いと考えられるものは、17世紀初めから中頃にかけたの徳守神社境内社住吉神社本殿と八出神社本殿で、これに同世紀末の千代稻荷神社本殿や地蔵院愛宕堂が加わる。地蔵院は正面柱間が10尺あってやや大きい、前3棟はともに8尺間で、正面の庇が縫破風であること、縫破風の位置が隅から2番垂木の位置にあること、組物は蛇腹支輪付の出組であること、背面側の妻飾りが虹梁太瓶束式であること、など多くの共通点があり、一つの規格がそこに介在していたようである。

ところが、18世紀に入るとそれらがかなり崩れてきて、平面の規模も大小が混在するようになるし、組物の形式も簡単な三斗組のものから二手先、三手先に及ぶものまで種々のものが発生し、非常に多彩となり、それが順次時代が降るにしたがい多用するようになる彫刻類と相まって、装飾偏重指向へと流れて行く。

その他外観上の変化として顕著なのは庇部分の扱いで、鎚破風形式は一部伝承されるものの、そのほとんどは向唐破風や軒唐破風として、正面側をより賑やかにしようとする傾向が加わることである。もっとも庇を唐破風にすることは、いわゆる中山造では中山神社や総社にもみられるから、大型社殿ではすでに中世からもちいられていたことがわかるが、それが18世紀になって一間社のしかも背面を切妻造とするこの種の本殿にも準用されるようになる事実は、社殿造営の計画段階にあって、中山神社本殿をはじめとする正規の造りになる三間社入母屋妻入社殿（いわゆる中山造）が常に理想形として念頭にあったものと考えられる。

構成文化財

1 中山神社



1-① 中山神社

中山神社は、『日本三大実録』貞観2（860）年正月戊寅条に「美作国正五位下中山神に従四位下を授く」とあるのが史料上の初見であり、同6（864）年8月官社に列せられ、同17（875）年4月には正三位に昇叙された（以上、同書）。

『延喜式』神名下に「苦東郡中山神社〈名神大〉」とあり、『今昔物語』にも「今昔、美作國二中参・高野ト申神在マス。其神ノ体ハ、中参ハ猿、高野ハ蛇ニテゾ在マシケル」とある。

『作陽誌』によると、戦国時代の天文末年出雲から進入してきた尼子晴久は、中山神社に拠って抵抗する苦田郡の国人らを制圧するため、本殿以下に火を放った。その後晴久は永禄2（1559）年社殿を再興した。

現本殿は尼子晴久によって建立されたもので正面3間、側面3間の正方形（方10.45m）で、単層入母屋造妻入、1間の向唐破風造の向拝を付す。屋根は桧皮葺で大棟には千木と5本の堅男木をのせている。妻飾りは虹梁大瓶束式、軒は二軒繁垂木である。柱はケヤキの総円柱。組物は出三斗で斗供間の中備には彩色彫刻で飾った^{かえるまた}墓股を入れている。腰廻りの四周には擬宝珠高欄の付いた縁をめぐらし、その縁の組物は三斗で斗供間にも墓股を用いている。

2 総社本殿



2-① 総社本殿

社誌によれば、その祭神は大己貴命である。そして左相殿には中山大神宮鏡造命を祭り、右相殿には高野大明神鵜茅葺不合命を祭る。さらに、左側の内宮には美作東半国の諸社、右側の内宮には西半国の諸社を祭るという。

社伝によれば、鎮座は古く欽明天皇の25（564）年と伝える。本殿は、永禄5（1562）年に毛利元就が再建したものと伝えるが、総社に残る棟札では、最も古いものは元和8（1622）年に^{もりただまさ}森忠政が「正一位惣社大明神霊社」を造立した時のもので、その詳細は不明である。現在の本殿は、明暦3（1657）年に森家2代藩主^{ながつぐ}長継が再建したもので、棟札も残る。

社殿は東向きに建てられており、昭和初年に建てられた拝殿と釣殿が本殿前方にあり、本殿の周囲は透かし塀に囲まれる。本殿はいわゆる中山造の建築で、大型の三間四方平面に向拝を付け、柿葺の屋根は入母屋造妻入とする。これは中山神社本殿の形式になったものとみて間違いないと思われるが、しかし、単なる模倣ではなく様々な相違点も見られる。両社を比較してみれば、総社本殿は全体に木柄が細く、向拝の出も少ない。更に、向拝については屋根を向唐破風としながらその上部に両下げ造風の屋根を重ねた二重屋根としている。また、棟飾りに千木や堅男木が見られず瓦積みとしている。

3 高野神社本殿



3-① 高野神社本殿

現本殿は、寛文3(1663)年森長継によって再建されたもので、現釣殿も当時の遺構である。正面3間、側面4間、入母屋造妻入で向唐破風造の向拝を付す、いわゆる「中山造」である。屋根は銅板張(もと檜皮葺)。大棟の両端には大型の鰭をもった獅子口を置いている。軒は二軒繁垂木、蛇腹支輪をもった出組、肘木、木鼻の意匠は唐様、斗拱の間には形の整った墓股を飾るが、全体的に装飾は簡素である。身舎の内部は正面1間通りを外陣とし、後の3間×3間を内陣とするが、その内陣の中に2間×2間の内々陣をつくっている。

4 徳守神社本殿



4-① 徳守神社本殿

天文8(1539)年に焼失したが、慶長9(1604)年春、森忠政が築城に先立ち、城下の鎮守として徳守神社を再建、同年内に落成して遷宮され、新田村において70石の社領を寄附された。2代藩主森長継は寛永14(1637)年さらに10石を加増し、寛文4(1664)年に社殿を新築した。現在の本殿・釣殿・拝殿がこれにあたる。

5 鶴山八幡宮本殿

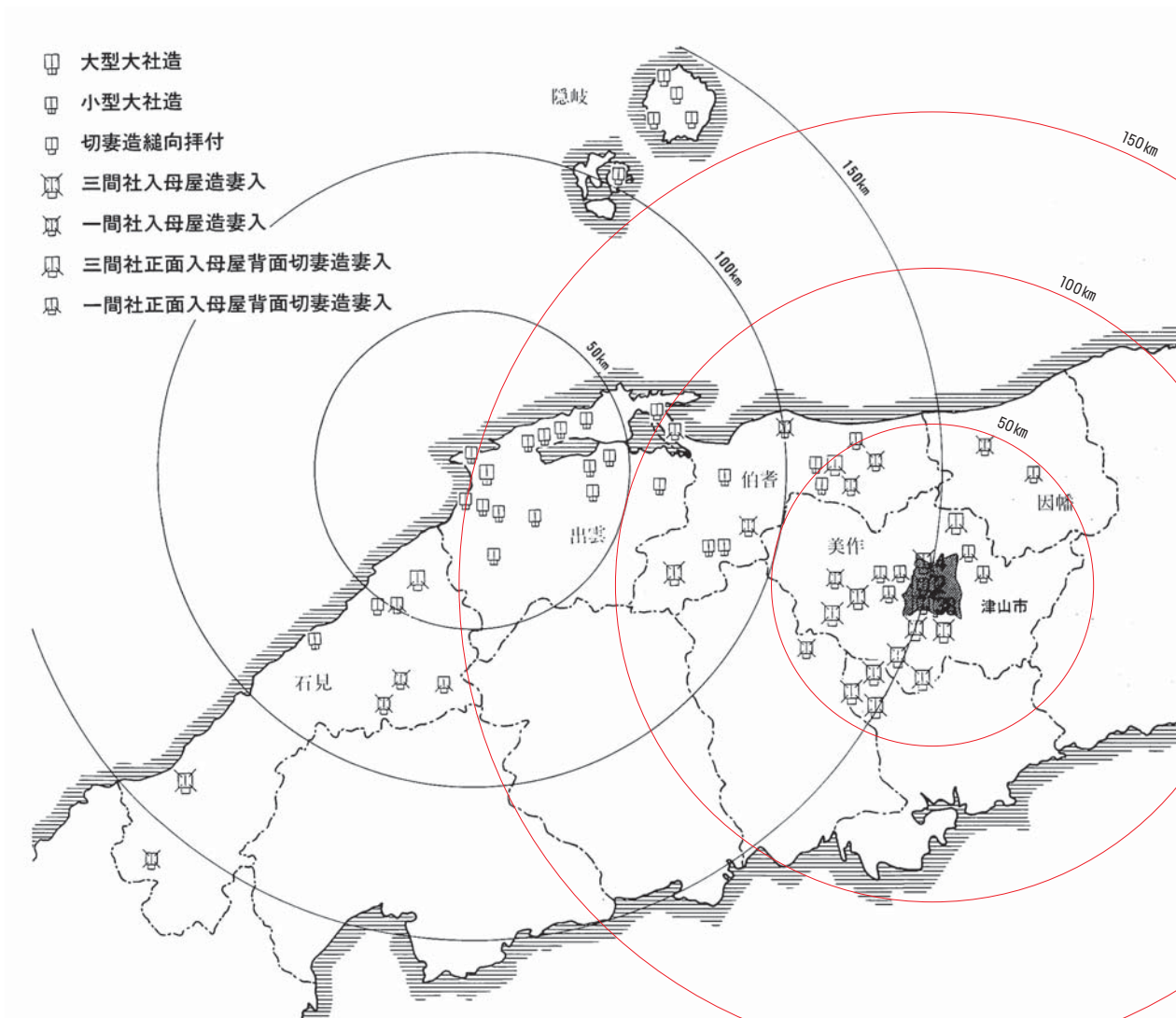


5-① 鶴山八幡宮本殿

慶長9(1604)年森忠政が城地を鶴山に決定した時、当社はその山上にあり、築城に際して南方の^{のぞきやま}硯山に遷宮された。しかし、同13(1608)年には城の北西・^{いざよいやま}不知夜山(現在地)に再遷される。これについては、八幡神の神託によるものと伝わるが、社地周辺の丘陵部を牽制するという津山城下の縄張り上の配慮もあったと考えられる。

現在の本殿は、寛文9(1669)年森長継によって建立されたもので、棟札が現存する。『作陽誌』によれば、慶長年間に造営、寛永12(1635)年南向きを東向きに改め(ともに棟札あり)、寛文8(1668)年に修繕して翌年落成とあり、慶長建立の本殿が存続しているかのような記述であるが、寛文の棟札には「奉再建立」とあって、建て替えられていると考えられる。

形式は、方三間、妻入の入母屋造に向唐破風の向拝を設ける中山造で、屋根は^{のぞきやま}檜皮葺(元来は檜皮葺)である。特徴はその装飾性にあって、軒の組物を三手先とし、各材先端部の獅子・象・龍、向拝部分の牡丹の彫刻に極彩色を施し、殿内にも極彩色を用いる等、華麗な造りである。



出雲大社と中山神社

(奈良国立文化財研究所「津山の社寺建築」1988 を一部改変)

ここが違う中山造（神社建築の世界）



※番号は構成文化財の写真番号

関連文化財群 7 航路ネットワーク 吉井川と高瀬舟**概要**

美作の地は、豊富な森林資源の供給地として知られていた。その森林資源を活用して、古代以来の製鉄に加え、紙すきが行われ、また木材加工を仕事とする木地師が活動していた。それらの生産品は、河川を利用した高瀬舟や陸路である街道（姫路から松江にいたる、出雲街道等）を通じて、畿内をはじめとした全国各地へと送られた。また、これらの物流に伴い江戸や上方の文化がもたらされ、河川や街道は、津山の物と文化を支える重要な交通路であった。今回は吉井川と高瀬舟について記述する。

ストーリー**■自然を活かした産業**

美作の地は、豊富な森林資源を有していることに加え、吉井川の上流の谷は、谷頭浸食の波及が遅れて浅い谷が多く、各所の小起伏面の存在とあいまって緩やかな高原状の部分が目立つ。このような地形や森林資源を活かして、鉄穴流しとたたらか製鉄が盛んに行われ、また、ろくろを使い、木を加工して木工品を製作する木地師が活躍をしていた。これらの山を利用した人たちは、この地域の独特の風土を作り上げてきた。

江戸時代、加茂地域の山は藩有林である御林や百姓もちの立林のほか野山と呼ばれる入会林野が多くあった。野山には、堆肥や飼料用の柴草山と薪・炭焼用の雑木林があり、後者には松・杉等の用材類も育成していた。明治以降特に大正末頃から林野への造林事業が盛んとなり、この地域を支える産業として成長していった。

また、加茂地域は、古くから鉄の生産地でもあった。特に江戸時代以降、砂鉄を原料とし、木炭を燃料として、地下に床釣りと呼ばれる大規模な保温・防湿の施設を持つ製鉄炉に、天秤鞆と呼ばれる踏鞆から酸素を供給し高殿の中で行われる製鉄方法であるたたらか製鉄法で製鉄が盛んに行われた。江戸時代、たたらの経営は、藩によるもののほか、商人や鉄山師と呼ばれる鉱山経営者によって行われた。たたらの操業によって、地域の人達も炭焼きや物資を運ぶ仕事を行い、収入を得ることができた。一方で、砂鉄を採取する工程で下流に濁水が流れ、下流の人達が訴えを起こすこともあった。また、砂鉄採取の過程で、大規模に山を切り崩したため、山の形が変わってしまうこともあり、今でもその痕跡が確認できる。また、製鉄の際にできる不純物である鉄滓（カナクソともよばれる。）は、いたるところで目にすることができ、地元の人たちにとっては珍しい光景ではないという。津山市では、加茂地域を中心に 200 か所にのぼるたたらか跡が確

認されており、そのうち、加茂町黒木地区の桑谷たたら跡とキザナゴ製鉄遺跡は津山市指定史跡として指定され、その他も周知の埋蔵文化財包蔵地として保存等の措置が取られている。

木地師とは、ろくろを使って木を削り、盆や椀、杓子を作る技術者のことを言い、江戸時代中ごろから次第に定着し、一部農耕を行いながら作業に従事するようになった。津山市北部の山間部にはこのような木地師集落がみられた。明治以降、木製品の需要は急速に減少するが、津山の木地師の技術は現在に受け継がれており、市内在住の小椋氏は、「木工芸」技術保持者として岡山県指定重要無形文化財に指定されている。

また、津山は古くから和紙の製造及び関連産業が栄えた場所で、市街地を南北にながれる宮川流域で和紙生産が盛んに行われた。大正から昭和にかけて西苫田村・津山町・林田町などで7軒程度の紙すき工場が操業していたが、現在はもう操業は行われていない。宮川上流の横野地区は、古くから紙すきが行われてきた地であり、ここで生産される箔合紙と呼ばれる特殊な紙は、多くが金沢に送られ、金箔加工の台紙として利用されている。この和紙を製造する上田氏は、「横野和紙製作技術」保持者として津山市無形文化財に指定されている。

■河川を利用した物資の運搬

これらの生産物を輸送するには、河川を利用した高瀬舟による輸送がよく知られている。高瀬舟は規模が概ね全長15m、幅2m程度の薄い板を組み合わせた木造船で底が平らで舳先が高くせり上がった独特な形をしている。船底が浅く平らなことで、水深の浅い川でも運用ができ、津山では、物資運搬において主要な役割を果たした。一時期は塔中（加茂地域）まで運用されていたが、江戸から明治にかけて常に運用されていたのは津山までである。津山での高瀬舟の発着場は、東は百間堤（東新町）、西は明石屋淵（安岡町）、そしてその中間の船頭町付近にあり、これらの河岸には、各地からの物資が集積することとなった。そのうち船頭町のものは、今の城見橋付近にあり、「大雁木」と呼ばれる堤防から降りる急な石段を設け、今の今津屋橋周辺には藩の船蔵や番所が置かれ、河原町には藩の年貢米蔵もあった。江戸時代には高瀬舟は藩の厳重な統制（例えば、高瀬舟への積載統制など）に加え、川水の増減などの自然的な理由や、下りに2日、上りに4日かかるといった技術的な制約により、自由な運航を行うことはできなかったが、江戸時代は森・松平両藩のもと発展し、明治期に入ると藩の制約がなくなり自由に運航できるようになると、高瀬舟は本格的な活躍の時期を迎える。しかし、自然的・技術的制約に加え、明治31（1898）年に中国鉄道が津山・岡山間で開通すると、鉄道との競争で劣勢を強いられ、衰退の道をたどっていく。高瀬舟がいつ頃まで運用されていたかについては、詳しい記録は残っていないが昭和の初め頃には終焉を迎えていたようである。高瀬舟が運行されなくな

り、その遺構はほとんど失われているが、檣地内の「檣船着場跡の常夜灯」と宮尾地内の「中須賀船着場石灯籠」はともに津山市指定の文化財として保存の措置が講じられている。また、押湊地内には、川の中にある大岩の「川中山王権現」の岩肌に上りの舟を引き揚げた曳綱の後が数多く残り、当時の苦労がしのばれる。

また、加茂・阿波地区の山で切り出された木材は、筏で組んで川を流送した「筏流し」が行われていた。それを今に伝える遺構は確認できないが、筏を組んだ場所を示す「筏場」の地名が、加茂町河井に残っている。

構成文化財

1 青柳杣



1-① 青柳杣

現在の加茂・阿波地区にあたり、鎌倉・室町期の記録によれば、本圀寺・下賀茂神社・園城寺等に木材を供給していた。

2 白金山



2-① 白金山

砂鉄を採取する作業では、大規模に山を切り崩したため山も形が大きく変わってしまうこともあった。現在でもそのことが確認できる場所が加茂地区には多く見られる。

3 桑谷たたら遺跡



3-① 桑谷たたら遺跡

この遺跡は、大量の鉄滓が出土していることに加え、付近に鉄穴流し地形が見られることに特徴がある。たたら操業の時期は、いずれも江戸時代と推定されている。

4 キナザコ製鉄遺跡



4-① キナザコ製鉄遺跡

この遺跡は、急峻な倉見川支流の西斜面上位に位置する。発掘調査で検出された焼土面から、製鉄炉は長辺約 90cm、短辺約 70cm、高さ約 65cm の箱型炉に復元することができる。炉壁の厚さは約 15cm で、長辺には 3ヶ所の送風孔が設けられている。出土した須恵器から、本製鉄遺跡の時期は 8 世紀半ば頃と推定されている。

5 木工芸技術



5-① 木工芸技術

小椋芳之氏は、昭和 22 (1947) 年に津山市鉄砲町で木地師の家系小椋六助の長男として生まれ、父に師事し木地師及び塗師技術を学んだ。小椋家は、代々、鏡野町羽出に居住した千軒木地師であり、芳之氏は、数少ない千軒木地師及び塗師の技術継承者で、高度な技術を有している。

6 横野和紙製作技術



6-① 横野和紙製作技術

上田家は、初代長吉が文化年間 (1804 ~ 1818) に津山松平藩の御用紙を漉くことを拝命して以来、200 年にわたり技術を継承してきた。現当主の上田繁男氏は 6 代目になる。昭和 17 (1942) 年に津山市上横野に生まれた。父に師事し、技術の研鑽に努め、数々の賞を受賞した。横野和紙は、薄くかさばらず表面がなめらかで、金箔を傷つけることもないため、箔合紙として日本一の名声を得ている。

7 船頭町 (高瀬舟の発着場)



7-① 船頭町 (高瀬舟の発着場)

ここには、高瀬舟の発着場があり、近くの今津屋橋周辺には、藩の船蔵や番所が置かれ、河原町には川戸蔵と称した藩の年貢米蔵があった。

8 櫓船着場跡の常夜灯



8-① 櫓船着場跡の常夜灯

津山藩は、吉井川の支流加茂川と因幡往還との接点である櫓村に船着場を設け、年貢米等の積み出しの便を図った。船着場には石雁木、荷揚げ場、米置き場、詰所などの施設の他に常夜灯が付設されていた。

本常夜灯は、花崗岩製で高さが 3 m あり、常夜灯の型式は高灯籠型で、3 m 弱の基礎石垣の上に乗っている。銘文によると、天保 9 (1838) 年の製作で、作者は櫓村住人・北田申兵衛とある。舟運の遺構がほとんど失われた今日、高灯籠型の常夜灯は、吉井川水系では他になく大変貴重なものである。

9 中須加船着場跡石燈籠



9-① 中須加船着場跡石燈籠

吉井川西岸にある3基の灯籠からなり、うち1基は金比羅灯籠で、嘉永7(1854)年の刻字がある。もとは高瀬舟船着場にあったものである。残る2基は内宮・外宮と刻まれた灯籠で、明治元(1868)年の刻字がある。いずれも中須賀の東端に建てられていたものといわれている。中須賀は、吉井川の川湊として栄えた場所で、鉄道等の開通によりその役割を減じた後も昭和10年代頃まで常夜灯として点灯されていた。灯籠には、近在の人々をはじめ、遠くは播磨地域の人名もあり、当時の人・物の交流や、信仰等を推し量ることができる。

10 川中山王権現



10-① 川中山王権現

川の中にそびえる大岩で、岩肌には上りの舟を引き揚げた曳綱の跡が残り、当時の重労働をしのばせる。

11 「筏場」地名



11-① 「筏場」地名

木材は、木材を筏に組んで河川を利用して運搬された。その筏を組んだ場所を示す、「筏場」の地名が今に残る。

